

藩主御目見え格以降の真吉

樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人
会長 安岡 明
文 責
寺尾敏夫

四八歳で初めて藩主に拝顔！

幕末(文久二年～慶応三年)の真吉の見た風景

●御目見え格に昇進
文久二年六月二十一日、**真吉は「御供達歩行」**を拝命し、翌二十一日高知城二の丸玄関にて藩主豊範とのお目通りを許された。そして藩主豊範の上洛に随行して上洛、これ以降真吉の見る風景は劇的に変わった。何よりも藩主近くに伝わってくる情報間接的に伝わって来るにしろその空間に居ることができた。とりわけ江戸に下って容堂公に仕える事になった。幕府の動静も容堂公へ伝えられる情報の範囲で真吉もそれらに接することができた。諸国探索の藩に**真吉を活用できた**であろうから、**真吉**を得難い人材として評価していたのではないだろうか。とりわけ**真吉**

は藩主に對し臆することなく自分の意見を書面で提言している。●幕末の六年間の**真吉**の活躍を俯瞰してみる。

【文久二年】 1862年

- ・6月21日 **真吉御目見え格に登用**
- ・6月28日 **藩主に随行して上洛に出発**
- ・**7月23日 龍馬に出会い、「1円贈る」**
- ・**8月7日 藩主に「天下の時勢」を上書**
- ・9月1日 西国へ探索
- ・11月21日 江戸へ下り藩主に復命
- ・11月29日 **御徒歩目付加役を拝命**

【文久三年】 1863年

- ・1月10日 大鵬丸にて容堂公に随伴して京へ向かう
- ・1月14日 下田港にて容堂公勝海舟会談
- ・1月25日 容堂公・京都着
- ・1月27日 真吉江戸方御徒歩目付役拝命
- ・2月15日 真吉、容堂公へ**「外夷拒絶策略」**を上書
- ・2月22日 容堂公にお目通り
- ・3月12日 真吉、望月清平と容堂公に召される
- ・3月13日 真吉、容堂公へ学習院への建白を許される
- ・4月12日 真吉、容堂公と共に高知へ帰着
- ・4月23日 真吉、中村に帰着
- ・5月18日 真吉、高知へ赴任
- ・5月29日 真吉、容堂公へ意見書を上書
- ・6月8日 間崎滄浪、平井修二郎が切腹
- ・7月3日 長州支援の上書を提出
真吉、7月～9月の間須崎砲台建設を指揮
- ・11月3日 真吉、歩行格に戻る
- ・11月7日 真吉、藩主豊範公より扇子を賜る
- ・11月16日 真吉、容堂公へ六連発銃を献納
- ・12月24日 容堂公は船で大坂へ、真吉随行せず

【元治元年】 1864年

- ・7月19日 京都禁門の変・・・真吉、上洛を申請するも却下

【慶応元年】 1865年

- ・5月11日 **武市瑞山切腹・・・以降真吉記録なし**

【慶応二年】 1866年

- ・2月 薩長同盟
- ・9月 真吉、記録再開

【慶応三年】 1867年

- ・2月15日 西郷が蒸気船で土佐へ来た
- ・3月30日 御徒歩目付役拝命(格式御用人)
- ・**4月4日 容堂公奉護のため上京を命じられ、5月4日船で出發**
- ・6月3日 真吉、中岡の仲介で西郷吉之助と会談
- ・11月16日 龍馬遭難現場検証、中岡から何かを？

真吉、幕末八年間の動静

藩主の御目見え格となつて、最初の一年は順風満帆で真吉は期待以上の活躍を見せている。藩主豊範公に「天下の時勢」を上書し、京都では武市瑞山と交流し、朝廷の人脈も拓ける中、西国探索の任も無事果し、江戸に下って容堂公にも報告した。以後容堂公の側近として務

めた。容堂公について「幕末足輕物語」の中にこんな記述がある。「・・・容堂公は直言を好んだ。但し、上司による直言である。真吉らがこれを行えば「分を超えた行為で処罰対象である」とみなされる。・・・。そのような人物であったから容堂公にお仕えるのは、

気苦労が多かったと思われるが、真吉は何ら臆することなく行動しているように見える。京都に滞在中、容堂公は「外夷拒絶策略」を上書した真吉をお召しになった。当時、攘夷攘夷と騒がしい中で、各藩ともに攘夷をどのように行えば良いのか困惑していたから、真吉の提案は実を待っていた。その後土佐に

帰国後は容堂公は土佐勤皇党の弾圧を開始したので、真吉も暫くは冷や飯を食つたハメになった。武市瑞山切腹から約一年半、真吉は記録を止めている。そして慶応三年四月京に呼ばれ幕末の舞台に戻ってきた。龍馬遭難の現場検証をした真吉は何を思ったのであろうか？二日ほど息があつた中岡から何を聞いたか？

真吉は建白書好き？

●真吉は現代流でいうなら積極的改善提案型の人間であつたらしい。藩の上司に対し積極的に提案を行つてゐる。中村の、いや土佐藩の誰よりも多く長崎に足を運び、武者修行名目で各藩士と剣を交えながら、藩内外の情報交換をしてきた真吉は、多くの情報を得ていた。それ故にそれらの知見を踏まえて提案をしてゐるが、果たしてそのような動機だけで提言をつづけたのだろうか。長崎を初め各地で西洋砲術を学ぶなかで諸外国と日本の技術の差異を身をもつて感じていた真吉には、国難を回避するには何を為すべきか、その視点から我が身を顧みずやむにやまれぬ思いで提言を続けてきたのであろうと思われ。渋谷先生の「樋口真吉日記上下」から真吉の意見書の履歴を並べてみた。いづれも真吉の書いた文章が残つていて、原文に触れることができる。

●「外夷拒絶策略」真吉は京都で文久三年二月十五日容堂公の許しを得てこの上書を提出した。同二十一日真吉は容堂公からお召しがあつた。上書の内容について容堂公に直接説明をする機会になつたと思われ。江戸幕府は安政元年に鎖国を止め五か国と和親条約を締結して既に十年、安政五年の修好通商条約締結から五年が経過してゐた。そしてこの時期朝廷は幕府に攘夷を迫つてゐた。どの藩

もどつて対心すべきか困つてゐた時期であつた。真吉は云う。「外国との貿易の条約は既に江戸幕府が朝廷の許容の無いまま締結して数年経過しているが、これを今直ちに拒絶すれば理は外国側にあつて日本は不利である。だからこのように外国に宣言してはどうであらうか。「わが国は古来外国と交易をしない国柄である。しかし先の將軍が幼少であつたころ側近の奸吏がその虚に乘じて私意を主張して条約を締結し天子に報告しなかつた。外国と密かに通信をな

【真吉の意見具申の履歴】

Table with 4 columns: Year, Date, Recipient, Content. Includes entries for 1845, 1852, 1861, 1862, 1863, 1863, 1866.

【1863年 容堂公に提出した「外夷拒絶策略」】

- 国内では以下の対策をとつて防備に備えるべし。
①諸藩は沿海警護について、兵团を設けて操練すべし。
②冗費を省き質素を旨とすべし。
③国許でも藩主血縁者は各地の代官を務め、民政に熟達すべき。
④武士は分限に応じて武具、馬具を備えるべき。
⑤僧侶は還俗させ、有用な者は武士に、無用なものは民間に落とすなど遊手の輩を無くすべし。
⑥仏具は有用の兵器に鑄立て直すべし。
⑦漁夫、漁師、百姓、商人のうち壮健なものは本業の余暇に兵团に入り訓練すべき。
⑧軍艦製造のこと。
⑨蒸気船のお買い入れが最も急務であること。
⑩京都御所の警備は人数を増やして充実させるべし。
⑪皇居の警備体制のあるべき姿を説く
⑫紀州、阿州（徳島）、淡洲（淡路島）そのた内海要衝の海浜には必ず砲台を築き、外国を侵入させないこと。
⑬外国が沿岸まで侵入すると、わが海軍は未整備なので敵上陸を待ち受け撃退せん滅する戦いになる。小舟数隻で夜討ちを掛ける。敵が港内に入れば前後左右から揺さぶる攻撃が肝要だ。
戦には兵糧が肝心であるが、諸藩は疲弊しているから永久安穩は調えがたい。諸大名は急ぎ帰国して家臣のうちから自分の代理になる者を選ぶこと。そうすれば上下一致し、士気振、国力は富賑し大業（夷敵撃破）が成就する。

すとは言語に絶することである。だから天子も激怒し、関係役人を処罰した。外国の諸君は、この奸吏に騙されて無効な条約を結んだことになる。本当にお互い不幸なことだ。しかし、既往のことをとがめても将来のことには役に立たない。水に流して諦めて、早々に帰国願ひたい。長崎港はオランダ船を年一回渡来することを

許可するので、今まで通りの貿易は可能である。その他の船は3か月以内に船団を率いて日本から去つてもらいたい。もし二日でも遅れた場合には、法があるから侮つてはいけな

である。容堂はうなづかたかもしれない。提案の裏には彼の今までの裏打ちされた見識と教養がある。決して空論ではない。「と記述している。
●同二十一日寺田小膳が航海術修行を命じられ江戸に行く。
●同二十八日軍艦買入れのため阿部喜藤次が江戸に行く。これが土佐藩の南海丸購入に繋がつた。容堂公は真

吉の提案の可能なものを次々に実行した。
●三月十一日真吉と望月清平らが容堂公に召され時事問題を聴聞しお酒を賜わり、かつお酌までしてもらつた。
●真吉より十二歳若い容堂公が、真吉と望月清平らに酒を与え、お酌までしたこの時、真吉は容堂公の信頼を最も実感できた時であつたらうし、自らも誇らしかつたであらう。

容堂公と真吉 その後

◆学習院への建白
容堂公の了解を得て、**真吉**は当初公家の教育機関であった学習院が複雑な世情を反映して様々な建白とか陳情の受付窓口になっていて混乱しているの、朝廷に対し、軍事は將軍家に委任し、国事に關しては天朝が親しく聞き取って決定されたいとし、その旨の勅書を出して欲しいという提案をしたのだという。勤王の志士としての気概であったろうか。

◆三月京都の土佐藩邸内で平井修一郎が収監され、容堂公の土佐勤皇党の弾圧が始まった。「幕末足輕物語」では「容堂による土佐勤皇党への弾圧の始まりの鐘が鳴った。その鐘は重々しく段々と四方に響き渡る。その音量は大きくは無いが真吉らに冬の時代の到来を告げる鐘であった。」と書いてあるが、こゝまで容堂公との信頼関係を築いてきた**真吉**にも少なからず影響が出てくるのである。

◆四月**真吉**は容堂公のお供で京都を發ち高知に帰着、そして中村に一年ぶりに帰って家族との再会を果たした。五月高知の小高家に住宅を買い転居した。

◆五月二十九日**真吉**は容堂公に上書した。**真吉**は高知に帰っても臆することなく容堂公に意見を述べている。

◆六月八日**真吉**は間崎滄浪、平井修一郎が切腹したことを知った。**青蓮院宮令旨事件**である。**間崎哲馬**は、土佐藩の藩政改革を行うため、土佐勤皇党が仲介して**青蓮院宮尊融親王**(中川宮朝彦親王)の令旨を奉拜しようと活動した。十二月、佐幕派の**青蓮院宮**は令旨を發したが、この越権行為が土佐藩主の權威を失墜させるものとして文久三年一月二十五日に上洛した山内容堂より「不遜の極み」であると逆鱗にふれ、文久三年六月八日(1863年)、**間崎**は平井收一郎、弘瀬健太と共に責任をとり切腹し、土佐勤皇党

の獄の犠牲者第一号となる。享年三十歳。何とも惜しまれる青年たち。この報を受けて**真吉**は直ちに過去の記録を見直して**間崎哲馬**の記述を消す作業を行ったと思われる。現代のワープロならその文字を消すだけでは足りる。しかし記録魔である**真吉**の膨大な手書きの日記等はそうはいかない。かなりの部分を書き直したであろう。江戸時代の武家社会に於ける藩主の権力とはかくも恐ろしいものであった。

◆容堂公は吉田東洋を高く評価し、藩の執政に付け藩政を任せる人事を行っていた。その吉田東洋を暗殺したのが土佐勤皇党一派である。当時容堂公は江戸在住であったので、七年ぶりに高知へ帰着する前に、京都に置いて早速に土佐勤皇党の弾圧を始めたのである。

◆**真吉**は勤皇派であったが、土佐勤皇党の武士瑞山一派に参画してはいない。**真吉**自身が徒党を組んで事を為すやり方を嫌悪していた

- 【慶応三年】1867年
- ・ 2月15日 西郷が蒸気船で高知に入り、容堂公に四賢公会議を勧める。
 - ・ 21日 西郷が宇和島藩へ向かう
 - ・ 3月6日 **真吉、幡多郡御郡方下役の辞令を受ける**
 - ・ 30日 **真吉、御徒歩目付役拜命(格式御用人)**
 - ・ 4月4日 真吉、容堂公奉護のため5月4日上京を命じらる。
 - ・ 23日 いろは丸沈没事件
 - ・ 27日 容堂公が京を経て土佐に向かう
 - ・ 5月4日 真吉、浦戸から京へ船で向い、8日京着
 - ・ 12日 真吉、中岡慎太郎、高松太郎と面会
 - ・ 14日 容堂公御所に登城 四賢公会議
 - ・ 27日 容堂公、帰国
 - ・ 6月3日 **真吉、中岡の仲介で西郷吉之助と会談**
 - ・ 8日 真吉、祇園で写真を撮す
 - ・ 22日 薩土密約成立
 - ・ 7月3日 後藤象二郎、帰国
 - ・ 27日 中岡慎太郎の陸援隊を白川邸に入れる
 - ・ 9月11日 **真吉、外交掛かり御用拜命**
 - ・ 21日 真吉、西郷を訪問する。
 - ・ 26日 真吉、大原卿に拜謁する。
 - ・ 29日 真吉、西郷と面談する。
 - ・ 10月3日 後藤象二郎が大政奉還の建白書を提出
 - ・ 10日 坂本龍馬、上京
 - ・ 13日 大政奉還が発表される
 - ・ 11月6日 **真吉、貨殖掛を拜命、大坂へ**
 - ・ 11日 真吉、京へ帰着
 - ・ 15日 龍馬、慎太郎遭難す
 - ・ 11月16日 龍馬遭難現場検証、中岡から何かを?
 - ・ 25日 **真吉、天章に会いに行く**
 - ・ 12月8日 容堂公、京に
 - ・ 12日 真吉、兵庫へ
 - ・ 24日 真吉、京へ戻る 兵糧米の手はずか

激動の慶応三年の真吉

風がある。武市瑞山の救命嘆願書にも組していない。結局武市瑞山は切腹となった。これ以降**真吉**は一年五カ月に渡って何の記録も残していない。**真吉**の出番もなかった。慶応三年になって、**御徒歩目**

付役を拜命し、幕末の舞台に戻ってきた。戊辰戦争前夜の慶応三年の**真吉**の動静は左記の通りです。四月に上京を命じられ、西郷とも面識を得て、九月には**外交掛かり御用**になった。少し早い任命であ

れば**薩土盟約**にも表に出ていたかもしれない。**真吉**は坂本龍馬暗殺の現場検証も御徒歩目付役として行っており、二日間ほど息のあった中岡慎太郎とも会話したはずである。容堂公自身が討幕の旗幟鮮明にしないうちで大政奉還の建白を出しておきながら、一方で討幕軍の

準備を進める土佐藩の二枚舌外交が、危うく明治維新政府軍側に乗り遅れそうになったのだが、その土佐藩を、かろうじて容堂公をして討幕派に舵を切らせたのは誰であったろうか？**真吉**か？一方で土佐藩を何が何でも必要としていた薩長の謀略説も有力ではある。

一月十五日 第四回総会

新旧会長挨拶

○四年間創業期の会長を務められた安岡明氏が退任し、新会長に土森正一氏を迎えましたので新旧会長のご挨拶をご紹介します。

【会長退任のご挨拶】

顕彰会役員の皆様・全会員の皆様、そして協賛会員の皆様へ！平成三十年一月十三日の樋口真吉顕彰会設立総会以来満四年間、皆様にお支え頂き心より感謝申し上げます。

大杉副会長、顧問・理事各位と共に、幕末期郷土の生んだ誉れの文武両道の偉人、樋口真吉の足跡を顕彰することにより、郷土愛を育む教育的効果・観光に繋がる経済的効果の向上を目指して活動を行ってまいりました。これまで足かけ五年間の活動を通して、一応顕彰会の基本的体制は整って参りました。今後の更なる本格的な発展を目指して、今回の第四回総会にて土森正一新会長

第四回総会



にバトンタッチをさせて頂きました。私はいずれからも、更なる拡大発展の支えとなるよう側面より応援して参ります。会員の皆様、協賛会員の皆様におかれましても、何卒今後とも樋口真吉顕彰会に引き続きのご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。誠にありがとうございました。本当に有難う御座いました。

【新会長のご挨拶】

本年度より樋口真吉顕彰会安岡明前会長の後を受けて、会長を拝命した土森正一と申します。どうぞよろしくお願いたします。顕彰会では、樋口真吉を顕彰していく中で、樋口真吉の足跡と生き方を、多くの皆様を知っていただくこと、四十市民総合体育祭の県道の部に於いては樋口真吉杯幡多剣道大会を開催。又、樋口真吉顕彰会・会報誌を年四回発行し、四十市出身の

幕末・明治初期の功勞者の一人である、樋口真吉を広めようと活動し、確実に実績を重ねられており、安岡明会長、大杉幹夫副会長をはじめとする役員の皆様、会員の皆様、この会に賛同していただいたおられます、支援者協賛者の皆様に敬意と



感謝を申し上げます。

私が樋口真吉を初めて知ったのは司馬遼太郎先生の代表作「龍馬が行く」で知りました。土佐幡多郡中村の郷土で樋口武（真吉）と紹介されております。日本の若い世代が心を震わせて読んだこの本は累計2500万部の国民的ベストセラーです。その本の中に四十市出身の樋口真吉の事が書かれている事を知ってこれは凄いなと思っ

たことでした。そして、樋口真吉会顕彰会で勉強していく中で、坂本龍馬さんと親交があり、脱藩した龍馬に大阪で一両を渡した話、龍馬暗殺の一月前に、身の危険を感じた龍馬は、在京の友人望月清平に火急の手紙を出し「今いる近江屋が危ないので、樋口真吉に頼んで安全な隠れ家を探してくれ。」と頼んでいました。樋口真吉には伝わらなかったのですが、龍馬が樋口真吉を信頼していることが分かります。この手紙の原本は、高知県立歴史民俗資料館に保管されています。さらに、中村に藩校（文武館）を創って人材を育成した事や、（のちの中村小学校です。）板垣退助率いる迅衝隊の一員だった、等、樋口真吉に関わる多くのことを教えていただきました。この素晴らしい人物を多くの人に、多くの四十市民の皆

様に知っていただきたいという思いであります。四十市の先人が残してきた歴史を教えたい、繋いでいく事は、今を生きる私たちの役目であり、責任だと思っております。この会の目的に沿って樋口真吉の新時代を開いてきた足跡と生き方を学び、またこれまでも埋もれていた歴史上の人物や伝統文化を発掘し触れることにより、郷土への愛着と誇りを育み、ふるさと教育の充実、又観光資源としての磨き上げもしていきたいと考えております。これまで樋口真吉顕彰会の皆様が行っ

編集後記

◆来賓として高知から「幕末足軽物語」の編集長森薫氏と編集に関わられた大原退助氏にお出で頂き、出版の舞台裏話をご紹介して頂きました。紙面の都合により次回号にてご紹介させていただきます。

◆今回ご出席の会員の方々から貴重なご発言がありました。ご先祖が戊辰戦争に行っていたか。ぜひ次号にご紹介したいと思っております。

◆総会は一月十五日十七時新ロイヤルホテルにて開会、中平市長、小出議長、久保教育長、石井県議のご祝辞を賜りながら、コロナ禍故に飲食を省き、ご参加の皆様のご意見も頂いて無事盛會理に終了することができました。